



ホストファミリー

大井川 和彦

シスコシステムズ
専務執行役員

昨年6月、高校一年生の一人娘をYFU (Youth For Understanding) 国際交流のプログラムで一年間米国への留学に送り出した。何事にもマイペースの娘には珍しく、自分から留学プログラムを見つけてきて、ぜひ行きたいと言い出したので、親としては娘のやる気を尊重して応募させることにした。

ほとんどの応募者が高校二年生の中で、一年生ながら辛うじて試験に合格し、いよいよ6月に出発という段になったが、なかなかホストファミリーが決まらない。友人や先輩の話を聞いて、勝手にプール付きの豪邸に住む裕福な家庭を夢見ていたらしい娘のところに通知が来たのは、出発予定の一週間前だった。

ホストファミリーは、何とシングルマザーで4人の子持ち！ 離れて暮らしている長女を除いて、高校二年生の次女、それに5歳と3歳の息子が一緒に住んでおり、小さな自動車配送会社を営んでいるようだった。

早速、家の周辺をGoogle Earthの衛星写真でチェックしたところ、広い草原の中に家がポツンと数軒あるだけの景色が浮かび上がってくる。

「あれ？ 住所を間違えたかな？」

あまりに期待と異なる画像に、再度住所を確認してチェックしてみるものの、また同じ景色が映る。家族ともどもしばし言葉を失ってしまった。

それから一週間後、今さら後に引くこともできず、大きな不安を抱え、半ベソで出発した娘であったが、ホストファミリーに温かく迎えられ、学校にもすぐになじんで、今では毎日楽しくやっているようである。

それにしても、娘は素晴らしいホストファミリーに出会ったものである。決して裕福な家庭ではなく、後で知ったことだが、一番年下の3歳の男の子は目に障がいがある。自分たちの生活だけでも大変だろうに、まったくのボランティアで日本からの留学生を一年間も受け入れるなど、なかなかできるものではない。

妻も私も、今年6月の高校の修了式にはぜひホストファミリーを訪ねたいと考えている。娘との久しぶりの再会以上に、この素晴らしいホストファミリーと会えるのが今から楽しみである。